

ネパール・カトマンズ ピルグリムズ・ブックハウス

ノセ事務所
能勢 仁



カトマンズはネパールの首都であると同時にヒマラヤ登山の玄関である。人口は七十万人弱である。市の中心地はタメル地区で、地図を見ながら歩いていても路地が複雑なので迷ってしまう。要所要所にチョークと呼ばれる広場があり、そこで現在地を確認した。

〈ピルグリムズ・ブックハウス〉は、タメル地区の一等地にあるカトマンズの代表的な書店である。創業一九八四年の老舗で、一階一五〇坪、二階八十坪の総合専門書店である。従業員は殆ど男性で二十人前後、グッズ売り場（土産物、紅茶、石鹸等）に女性が五人ほどいた。

奥行きは三十間（五十四メートル）と深い。売場がジャンルにより個室風に独立売場になっているのに驚かされた。二階の個

室化されたジャンルは次の通り。

一・自然史室、二・宗教室、三・小説室、四・歴史・政治室、五・こども室、六・絵本室、七・未就学室、八・言語室、九・ビジネス室、十・芸術書室、十一・ヒンズー教室、十二・ブツデイズム室である。個室化陳列であるが、各部屋はすべて通過できる構造になっている。山岳書コーナーの充実ヒマラヤ登山に相応しい。喫茶室三十席が一階奥にあったが、喫茶室の壁面にガラスケースの書棚に古書が約千冊陳列されていた。販売はしていない。

品揃えは次の通り。

一階・新刊書、ベストセラー、山岳専門書、旅行書、写真集、ポストカード、ネパール紅茶、香料、石鹸、刺繍、仏具、パッシ（山岳者用）

二階・前記列挙した個室のジャンル

とうとうスミレの花がさきました。

線路の赤茶けた石のあいだに、かがや

くよつなむらさき色のスミレが一つさ

きました。たった一つでしたが、その

ために、あたりの世界がばあっと明る

くはなやいだようでした。

『クレヨン王国いちご村（新装版）』

福永市三著（講談社青い鳥文庫）より



もくじ

世界の本屋さん 52

「書標」歳時記（4月）

著書を語る(52) 『みつばち高校生 富士見高校
養蜂部物語』 執筆に寄せて

森山 あみ

2

書標・書評 『人生パンク道場』 ほか

特集 臺灣のレッスン

ようちえん、ほいくえんってどんなところ？

学校ってどんなところ？

今月のおすすめ

社会科学 16 コンピュータ 18

自然科学 19 医学書 20

人文科学 21 文学・文芸 22

文庫・新書 23 芸術 24

実用書 25 地図・旅行書 25

語学・辞典 26 児童書 27

読者から

インフォメーション

本屋うらばなし 「改装して思うこと」

30 28

※表示価格はすべて本体価格です。

『みつばち高校生 富士見高校養蜂部物語』執筆に寄せて

森山 あみ



八ヶ岳を臨む長野県富士見高校には、全国でも珍しい養蜂部がある。私がこのことを知ったのは、まったくの偶然からだった。偶然見た長野のローカルテレビで、偶然にも養蜂部が取材されていた。見た時すぐには高校生の部活だとは分からなかった。生徒たちはミツバチの着ぐるみを着て、すごく楽しそうに活動していたからだ。

興味を持ち、ネットで調べてみると、富士見高校養蜂部は創部三年目にして「日本学校農業クラブ全国大会」のプロジェクト発表部門で日本一になったらしい。これは使えろ——と思った。脚本の仕事をしている関係上、ドラマにできそうなネタには常にアンテナを張り巡らしている。養蜂部への最初の食い付きは、活動への興味というより、ビジネスになるという、いささか生臭いものであったことは否定できない。まずは本にしたいと思ひ、企画書を出版社に持ち込んだところ、幸先よくある大手から前向きな返事をいただいた。伝手を頼って養蜂部顧問の北原先生に取材を申し込んだのが平成二十五年一月のこと。凍てつくよう

な寒さの中、私を迎えてくれたのは元気いっばいの生徒たちだった。「こんにちは」と挨拶しながら駆けて来るパワーに圧倒され、思わず後ずさってしまった。ストーブの上でヤカンが湯気を立てるプレハブの部室でインタビュー開始。そこで語られた内容に、私はすっかり引き込まれてしまった。

富士見高校養蜂部は、「ミツバチを飼いたい」という、ひとりの女生徒の発案から始まった。最初は野生のミツバチを捕獲できずに、地域の篤志家から群れを分けてもらう形で活動をスタートさせた。初めての採蜜、巣別れ、天敵スズメバチとの闘い、ミツバチと過ごす日々は驚きと感動に満ちている。最初はおっかなびつくりだった部員たちも、すぐにミツバチの可愛さに魅了されたという。ミツバチを飼う上で、自然あふれる環境作りは欠かせないものだ。そしてそれは、地域の人たちの理解と協力なくしては成し得ない。富士見高校養蜂部は、緑を増やすガーデンづくりや、ミツバチを知ってもらうための寸劇「ハチさん劇場」、ハ

チミツを活かした料理作りなど、活動の幅を広げていった。そしてミツバチが喜ぶ環境づくりは、「富士見みつばち百花プロジェクト」として、町ぐるみの活動へと大きく発展した。

養蜂部がいかに地域の人たちに愛されているかを知る機会があった。取材を始めて二ヶ月後のことである。部が平成二十四年に日本学校農業クラブ全国大会で優勝したことを祝って、(全国の農業系高校生の集い。このような大会があることも取材で初めて知って興味深かった)、地域の人たちが祝賀パーティーを催したのに私も参加させてもらったのだ。町の公民館で、手作りの郷土料理「おやき」やお餅を食べながら生徒たちの快挙を祝う地域の人たちの笑顔は温かった。「優勝できたことよりも、地域の人たちに喜んでもらえたのが嬉しい」と語る先生の涙も見た。そこで初めて、「この本は中途半端な気持ちで書いてはいけない」と身を正される思いがした。

みんなから激励を受け執筆を始めたが、途中で出版社の事情から企画が頓挫してしまった。「あんなに応援してもらったのに顔向けができない」と意気消沈していたところ、北原先生から長野市にある出版社・リンデン舎さんをご紹介いただいた。「いい企画なので、ぜひとも本にしましょう」という豪気な社長のひと言で、出版は一気に現実味を帯びた。

本書の内容は、養蜂部創部から農業クラブで全国優勝するまでの約三年間がドラマ仕立てで書かれている。インタビューを元に行っているが、私が脚本家ということもあり、

どうしても失敗談や苦勞話を伸ばしたくなってしまう。生徒さんから「事実と違う」とやんわりお叱りを受けたこともある。みんなの中にある、養蜂部での楽しい思い出を汚してしまっているのではないかと、いったんは執筆を見送ろうかと考えたりもした。しかし先生や生徒さんたちに我慢強くお付き合いいただいたき、みんなが納得する形でこの本を世に出せたのは嬉しいかぎりである。

今、世間は農業高校がブームだそうだ。農業高校には地域を元気にする力がある。取材を通して、若い世代が本当に頑張っているのだということ学ばせてもらった。

自然や地域と共にある、みつばち高校生たちの喜びや感動の息吹を少しでも感じていただけたなら、作者として光榮である。



『みつばち高校生
富士見高校養蜂部物語』
リンデン舎・1,500円



『人生バンク道場』

町田 康著

KADOKAWA・一五〇〇円

人生相談本は数多く存在し、さまざまな方々が人々の悩みを聞き、そして答えている。その答えには往々にして、答える人の人柄や性格が如実に表れる。

そんな人生相談を町田康氏が聞いたらどうなるのか。これは面白くなるに違いない、何の疑いようもないとそんな心持で読んだら、いい意味で予想を裏切られた。面白いことは間違いないのだが、タイトルの『人生バンク道場』という言葉からおおよそ想像するには、バンクとあるのだからなにか型にはまらない自由な我が道をゆく的な回答が多いのかと思いきや、全くそんなことはなかったのだ。とにかく一つ一つの質問に対し、真剣に向き合っているのだ。質問を根本から問い、着実に解決への方向へ導いているのである。とはいっても、背筋がかゆくならないような、ポジティブでただ上辺だけの回答ではないのがまたなんと信頼でき

る。そしてやはりそこは町田康氏の回答なだけあって、常人では思いつかないところからの視点での解決方法で、おおーと感服しきりなのである。その思考方法はどこから生まれてくるものなのか、なにか嫉妬すら覚えてしまうほどだ。

やはり町田康氏はただものではない。そんなただものではない町田康氏の『人生バンク道場』にこの本を読めば道場の門をくぐったも同然。きっと人生を強く可笑しくそしてまじめに生きていけるとだろう。私は門をくぐって師匠からたくさん生きていくためのヒントを教えていただいた。一人でも多くの方に門をぜひくぐってほしい。(羊)

『人工超知能が人類を超える』

会場時生著 日本実業出版社・一六〇〇円

人工知能の分野は日々めざましい進歩を続けている。プロの棋士を打ち負かし、コールセンターに就職を決め、星新一賞の一次予選を通過するまでに至った。人間側がこれらの出来事を幼児の成長を見のように微笑ましく思えるのはいつまで話だろうか。

本書は、近い未来に訪れる技術特異点

に起こりうることを予想し、その未来の是非を問うと共に、人類の生きる根源的な意味を考える。技術的特異点とは、科学技術の進歩が超高速化する時を指す。特異点を超えると、人工知能は今まで人間が担ってきた活動を余すことなく代替・超越してしまう。結果、人間は働く必要性を失い、欲するものはすべて与えられ、一瞬にしてあらゆる知識をインストールでき、その身は限りなく苦痛を忘れた不老不死へと近づく。さて、人工知能の発達は、諸手をあげて享受すべきか、何があんでも回避すべきか。

人工知能の父とよばれたチューリングは「機械は思考する」と言った。思考とはなにか、意識とは、幸福とは、生きる意味とはなにか。人工知能を考えることは、人間を考えることだ。著者は生物的進化の最終点に人類を置き、さらに今後人類がどのように進化をするか(あるいはしないか)を予想していく。

十分に発達した人工知能は神と見分けがつかない。我々が親しんできたサイエンス・フィクションの世界は目の前に迫り、今日も人間の根幹を揺さぶり続けている。(傘)

『マルクスと賃金つくりたち』

大黒弘慈著 岩波書店・二七〇〇円

人は決して一人では生きていけない。生きていくために必要なものを、自分で作り切ることは、できないからだ。

そうして、人は他の人とモノを交換し合う。交換は、必ず異なったモノで行われる。そうでないと交換の意味がない。

他の人との間での異なったモノの交換が妥当なものであるという判断基準、交換されるそれぞれの量が妥当かどうかの尺度は何か？ 尺度は、交換される二つのモノとは別のモノでなくてはならない。

— 交換は、二人の人の間で、二つのモノによって行われるだけではない。交換は、無限に連鎖していく。それらの交換が総体として妥当なものであるための尺度は、交換されるすべてのモノとは別のモノでなければならぬ。尺度は貨幣として選ばれたのは、それ自体実は人間にとつて何の役にも立たない貴金属であった。

ところが、尺度となった途端、貴金属は人間の欲望の対象となった。そして、尺度は貨幣こそ人が何よりも手に入れたいと願うモノとなった。すると貨幣は、それ自体が商品となり、交換されるよう

になる。資本という名のカネは、無条件に自己増殖へと駆り立てられ続ける。

そうなると、貨幣は尺度として盤石ではなくなる。モノの本当の価値を量る何かがあるのではないか？ 労働時間が尺度と考えられたりした。

経済の困難とは、人間が生きることの困難である。その困難の解決に、古今東西多くの賢人が悪戦苦闘してきた。

それにしても、アレクサンドロス大王に「望みは？」と訊かれて「そこをどいて欲しい」と言ったディオゲネスが、元「賃金つくり」だったとは。哲学は鑄造貨幣とともに始まった……。面白い。(フ)

『年下のセンセイ』

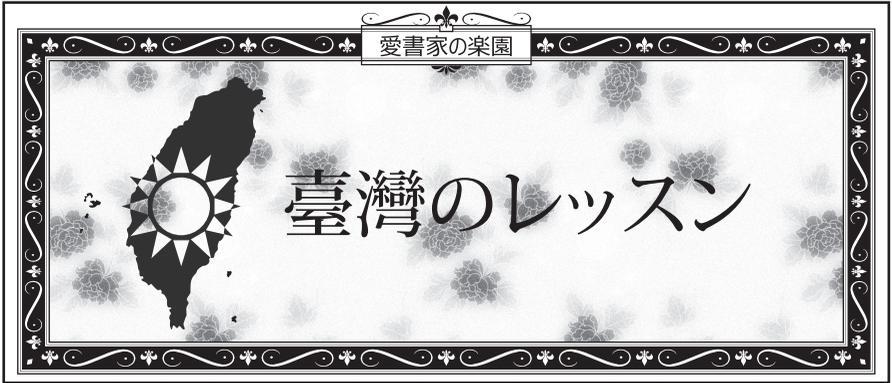
中村 航著 幻冬舎・一四〇〇円

きれいな、だと思った。

よく十代の恋愛模様を「甘酸っぱい」と例えるが、これは十代だけの特権ではない。どうしようもなく惹かれ合い、気持ちを通じ合う喜びを知る。それでも変化を畏れ、気持ちを受け入れることが出来ずに相手を突き放してしまう。とっくに終わりを迎えていたのかもしれないと感じながら、どうしても会いたいと待ち

続ける。何が正解かもわからず、悩んで描かれている。

そんな主人公と年下の「センセイ」の出会いが生け花教室なだけに、作中には花がたびたび登場する。その花が場面ごとに、更なる彩りを加える。そして花と真正面から向き合うことで、自分とも向き合うことが出来る。生け花まではいかなくとも、道端に咲く野花でもいい。これから少し花を見る目が変わる予感がした。人間は、考えてしまう生き物だ。だが、それが必ずしもプラスに働くとは限らない。これは恋愛だけにいえることではないが、恋愛では特に顕著に現れるのではないか。「愚か者の得意なフットワーク」という言葉が出てくる。「失う前から失うことを怖れる。得てもいいのに、失うことを畏れる」ことらしい。初めて聞いた言葉で、でも妙に納得した。確かに得る前から失うことを畏れていたなら、きっと自分には何も残らない。しかしこの物語には、愚か者から「賢者のフットワーク」へと変わる瞬間がある。その瞬間、きつと一歩踏み出す勇気を与えてくれることだろう。(佐)



台湾を訪れた人は、たいてい台湾ファンになって帰ってくる。自然が美しい。食べ物が美味しい。不思議な懐かしさを感じる。そして一番の魅力は、なぜそんなにと思うほど人々が優しい。けれど、好きになるほど疑問も増えてくる。例えばこんなふうに。

「いったい日本とアメリカという『大国』と正式国交を欠いたまま驚異的な経済発展を遂げ、長い時間をかけて軍事政権から民主政権への軟着陸に成功した台湾とは、どのような社会なのか。濃縮された空間に数多くの民族と言語を抱えながら、きわめて実験的な文学や洗練された映画を産出してやまない台湾とは、どのような文化なのか。そしてかつて日本に植民地化され、幾多の不平等と屈辱を感じながらも、東日本大震災のおりには二百億円という驚異的な義援金を短期間に集め、平然と日本に送りつけてくる台湾人の心情とは、いったいいかなるものなのか。」(四方田犬彦『台湾の欲び』より)

日本に縁の深い、当事者ですらある事柄にもかかわらず、答えに窮する難問だとなれば、次の問いはこうである。私は台湾について、何を知らないのか？

『図説 台湾の歴史』

(平凡社/周婉筠著/三〇〇〇円)

『台湾 四百年の歴史と展望』

(中央公論新社(中公新書) / 伊藤潔著 / 七〇〇円)

台湾の理解に歴史の知識が不可欠なのは当然の話だが、これがそう簡単ではない。大航海時代のオランダ支配に始まり鄭氏政権・清国・日本・国民党政権と続く統治の大変動があり、また十七世紀以降に対岸から渡った閩南系や客家系、国民党政権と共に移住した「外省人」(それ以前から台湾に住んでいた人々は「本省人」と呼ばれる)、そして原住民(「先住民」という言葉は既に絶滅してしまっただという意味を帯びるため台湾では使わない)という重層的な多民族社会がある。書き手の出自、思想、時代によって歴史像が異なるのはどこも同じだが、台湾の場合とはくにその傾向が強い。でも悩むことはない、何冊でも読めばいいのだ。それぞれの違いを認識するほど実態に近づけるだろうし、第一その読書体験は退屈ではない。ここに挙げた二冊は定番的な通史らしく、多くの台湾本に引用・参照されている。『台湾 四百年の歴史と

展望』はコンバクトで読みやすく、『図説 台湾の歴史』は原住民の歴史を含めバランスよく記述されている。

『台湾海峡一九四九』

(白水社／龍應台著／二八〇〇円)

一九四九年、国共内戦に敗れた国民党政府軍と戦乱を逃れた民間人とが大挙して台湾へ押し寄せた。その数約二百万。一方、五十年にわたる日本の統治期を経た台湾人は、この「外省人」という新たな勢力の大波にのみ込まれた——要約すればそんな歴史叙述の向こうに、想像を絶する傷口が開いている。河南省から疎開した五千人の学生は、苛酷な流浪の末に台湾に着いたとき二百人ほどになっていた。国民党軍も共産党軍も誘拐した少年たちを兵士に仕立てたから、幼馴染がとつぜん敵になった。南洋で日本軍捕虜収容所の監視員を務めた台湾人は、戦後に戦犯として裁かれた。外省人も本省人も、大陸の間も、思いもよらぬ運命に弄ばれておびたらしい死と別離に直面した。誰も全貌など知ることはできない」と著者は言う。巨大な国土と入り組んだ歴史を持ち、好き勝手な解釈と錯綜した

真相が溢れ、そしてあまりのスピードに再現もおぼつかない記憶に頼って、何を「全貌」と言えるのか。人々の膨大な肉声を丹念に聴き取ったこの本は、だから歴史ではなく文学であり、「文学だけが、花や果物、線香やろうそくと同じように、痛み苦しむ魂に触れることができるのだ」と。その「痛み」こそが、独立か統一か現状維持かで揺れ動く台湾社会の、安易な図式化など許さない心の壁を教えてくれる。

『ふたつの故宮博物院』

(新潮社(新潮選書)／野嶋剛著／二二〇〇円)

まったく同じ名前前の博物館が、北京と台北にある。辛亥革命後、紫禁城にあった文物が一般公開されたのが故宮の始まり。日中戦争の戦火を避けるため文物は大陸の南と西に疎開し、さらに国共内戦の勃発で蒋介石とともに一部が台湾に渡って現在に至る。ここまではよく知られた話だが、本書は台湾における二度の政権交代が台湾故宮博物院に与えた影響までをレポートしている。故宮の大きな特徴は、それが中華文明のみの博物館で

あることだ。二〇〇〇年に生まれた民進黨政権は、故宮を中華だけではなくアジア文化の博物館として変革しようとしたが、二〇〇八年に政権を奪還した国民党は元の路線に戻した。いっぽう中国では、海外に流出した美術品を買い戻す「回流現象」が起きている。政治と文化の関係には、どんな深淵があるのだろうか？ 「文物」は、中国の歴史のなかで特別な意味を持っていた。文物の所有は歴史の所有であり、それを持つことによって権力は正統性を獲得する。中華において文化は政治の自己証明である、と著者は言うのだが……。

『台湾の歎び』

(岩波書店／四方田犬彦著／三三〇〇円)

台湾での長期滞在に基づく「批評的に検証された旅行記」。街、文学、映画、信仰と対象は多岐にわたり、紹介したい箇所ばかりだが、二つだけ。まず言語について。台湾は多言語社会であり、われわれには想像もできない複雑な言語環境を日常的に生きている。もちろん歴史的な対立、抑圧、葛藤がありながらも、「ときに彼らは複数の言語をジャグリングの

ように扱い、遊戯的に使いこなす」。その創造的なコトバのありようは、本書だけでなくここに挙げた書籍のあちこちに見いだされるだろう。

もう一つは日本への視線である。「反日」「親日」という二分法は、日本に対する複雑な感情を強引に単純化し、ステレオタイプの枠のなかに押し込んでしまふ。日本が植民地化したことのある場所に生まれ育った人間にもし二分法を適用するとすれば、それは知日と無知日の二通りしかない、と著者は言う。台湾を親日国だから安心だと無邪気に言っている日本人にこそ歴史的無知が横たわっているのだと。日本統治時代に台湾代表として甲子園で活躍した嘉義農林中学校を描いた映画『KANO』もまた、「親日映画」ではありえないことが分析される。

『セデック・バレ』

(出版ワークス／魏徳聖原案・原文、嚴云農著／一六〇〇円)

その『KANO』を製作、『海角七号』『セデック・バレ』等を監督し、台湾の配取記録を塗り替え続ける映画人が魏徳聖(ウェイ・ダーション)であり、いず

れの作品も中国語と台湾語と日本語と原住民の言語が当たり前のように飛び交っている。本書は霧社事件(日本統治時代に起こった台湾原住民による抗日暴動事件)を題材とした同名の映画と並行して制作された小説版であるが、『KANO』が親日映画ではないように、『セデック・バレ』も反日映画ではありえない。この二作を同じ人物が作り、そしてどちらにも台湾の観客が熱狂したという事実がそれを証明しているだろう。残酷さという点では日本軍も原住民側も等しく描かれ、日本人を名乗る原住民が重要な役割を演じている。勝者にも敗者にも歴史や文化はあり、この映画はどちらが正しいかなんて言っていません、ただ台湾に原住民がいるという事実を知ってほしいだけです、と魏徳聖は語っている。

『步道橋の魔術師』

(白水社(エクス・リブリス)／呉明益著／二一〇〇円)

現代台湾文学を牽引する若手作家による連作短篇集。かつて台北に実在したショッピングモール「中華商場」に住んでいた子供たちが大人になり、当時を回

想する。物売りが立つ步道橋には、不思議なマジックを披露する「魔術師」がいた。初恋、別離、孤独……人生を決定づけるような体験のなかで、子供たちは吸い寄せられるように「魔術師」に近づき、その謎めいた言葉と魔術によって日常の奇妙な裂け目へと引きずり込まれる。

かつての懐かしい日本のような、でもやはり台湾でしかありえない街の匂い。迷宮のような商場には、何でも無い所に異空間が口を開けている。子供時代のささやかなエピソードが、想起されるその瞬間、幻想的な寓話に変貌する。

『T5 台湾書籍設計最前線』

(東京藝術大学出版会／東京藝術大学美術学部編／二五〇〇円)

台湾には面白い装幀が多い、と前から思っていた。これは台湾を代表するブックデザイナー五組のインタビュー集。台湾ではブックデザインが広告デザインをリードするという。収入の高いジャンルではないので、これは世界でもめずらしいかもしれない。小冊子を段ボール箱にギュウギュウに詰め込み無造作に黒テープでとめた「本」。イラストと化したパー

コード。刺繍で書かれたタイトル。ページの半ばまでくりぬいたように見えるカバー。繁体字のタイポグラフィの美しさは、同じ漢字文化圏の人間として刺激的だ。台湾として出版状況は日本とさして変わらず、コストの制約は厳しい。だから彼らは、ありふれた印刷加工で最大限の効果を出す工夫をしたり、限定版や自費出版でアバンギャルドな試みをする。限定版を先に出して話題性を喚起し、その後通常版で発行するという手法もよくとられるらしい。

『台湾生まれ 日本語育ち』

（白水社／温又柔著／一九〇〇円）

著者は台湾で生まれ、三歳の時に東京に移り住んだ。日本統治時代に教育を受けた祖母は台湾語と端正な日本語を話す。母親は中国語と台湾語と日本語がちゃんぽんで、娘はそれを「ママ語」と呼んだ。娘が自由に操れるのは日本語だけで、学校では日本人の生徒と同じように振舞っていたけれど、街中で中国語や台湾語を耳にすると、それらの「音」によってどうにか形づけた大量の記憶があることに気づく。わたしの母語は何な

のか？ 三つの言語のはざまで揺れ惑い、やがて「わたしは日本人ではない、しかし日本語で生きている」という認識を得たとき、「母語」の呪縛から解き放たれた一人の作家が誕生した。小野正嗣氏は本書をこう評している。「ついに三つの言語が響き合うこの『ママ語』を、みずからの母語として、そして文学の言語として引き受ける姿は感動的だ。文学とはつねに複数の言語の〈あいだ〉で書かれるのだ。」

『わたしの台南 「ほんとうの台湾」に出会う旅』

（新潮社／一青妙著／二二〇〇円）

台南という街だけを扱った本は珍しい。書店ではだいたい旅行ガイドのコーナーに置かれており、確かにグルメ情報も豊富ではあるものの、核となるのは人情味あふれる市井の人々の描写だろう。台南は古都である。日本統治時代に台北に首都の座を奪われ、戦後の経済発展も遅れた。おかげで古い街のたたずまいや歴史の遺産も残っているのだが、いま台湾人の間で台南ブームが起きているという。若い世代がここで新しいビジネス

や芸術活動を始めているのだ。ある芸術家は、台南を「実験できる場所」と表現した。台湾人は常に不安定な時代に対応してきたけれど、台南はとりわけ柔軟性を持っている、と。長きにわたり、そして今も、多くの苦難に直面してきた台湾。「柔軟性」はたぶん、彼らの優しさと無縁ではない。 （白水社・渋谷）

*愛書家の楽園・特集「臺灣のレッスン」でご紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベーター前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、四月十日～五月九日までフェア展開中です。



四月になりました。新入学、新入園、そして進級された皆さま、おめでとうございませう。

新しい学校や新しい教室、先生、そしてクラスメイト……。親御さんにとっても楽しみだったり不安なことも多いこの季節に、本の中にも自分と同じようなことを思っているお友だちがいることや、こんなふうに通いごせたら楽しいだろうなあと想像していただけたら、と、幼稚園や保育園、小学校を舞台にした絵本を紹介させていただきます。

幼稚園や保育園って、どんどころでしょう？

それを紹介してくれる絵本があります。

『ようちえんのいちにち』（佼成出版社・おかしゅうぞう作・ふじたひおこ絵・一五〇〇円）

『ようちえんのはる・なつ・あき・ふゆ』（佼成出版社・おかしゅうぞう作・ふじたひおこ絵・一五〇〇円）

『ほいくえんのいちにち』（佼成出版社・おかしゅうぞう作・かみじょうたきこ絵・一四五六円）

『ことりようちえんのいちねんかん』

（講談社・たかてらかかよ文・鴨下潤絵・一五〇〇円）

一年をどんなふうに通ごすのか、どんな行事があるのか、楽しい思い出がたくさん出来るといいですね。



『ようちえんのいちにち』

行事をテーマにした絵本はあかね書房『くりのきえんのおともだち』シリーズ全十二巻（寺村輝夫、守屋正恵作・いもとようこ絵）や童心社『ピーマン村のえほんたち』（中川ひろたか文・村上康成絵）があります。

『くりのきえんのおともだち』は、くりのきえんに通う動物の子ともたちが、遠足の前に通う動物の子ともをつるしたり、七夕飾りをしたり。「ピーマン村」の子ともたちも、いもほりやえんそく、キャンプにプール開きに運動会、そして卒園までの一年を通した子どもたちの様

子が生き生きと描かれています。



『おたんじょうびのひ』

年に一度のお楽しみ、といえはばお誕生会。

『おたんじょうびのひ』（朔北社・中川ひろたか文・長谷川義史絵・一二〇〇円）では、明日お誕生日を迎えるよしふみくん、生まれたときのことをきいてきてねと先生に言われ、お母さんに尋ねます。自分が生まれたときのことをみんなに発表する素敵なお誕生会になりました。

新人生だけじゃなく、進級した年長さんのお話もあります。

『ぼくはねんちようさん』（小学館・サトシン作・田中六大絵・一四〇〇円）

これまでとは違う、ちよつと大きくなったことを実感している「ねんちようさん」の様子が描かれています。背が伸

びた、とかそういう「大きさ」ではなく、ちよつとしたことなんだけれど明らかに違う自分がそこにいるのです。

頼りになる年長さんと言えば、『きみたちきようからともだちだ』（朔北社・中川ひろたか文・長谷川義史絵・一二〇〇円）。ここに出てくる年長さんたちは、何もわからずドキドキしている新人生たちに園の中のいろんな事を教えてくれます。靴を入れる下駄箱、トイレの場所。給食を作ってくれている調理室。園庭でプランコの取り合いが起こったら仲裁もしてくれます。このお兄さんお姉さんたちの教えの中で一番素敵なのは、今いっしょにここにいる、何もわからなくて同じようにドキドキしている子はみんな今日からともだちなんだよ、という歌です。



『ぼくはねんちようさん』

幼稚園では「事件」も起こります。

『ようちえんのおひめさま』（講談社・村有希子作・一四〇〇円）

園庭にあるしかけ時計では毎日九時になると音楽が流れ、お姫さまと王子さまの人形が現れます。園のみんなはこのお姫さまたちに挨拶するのを楽しみにしています。でも、嵐の翌日、このしかけ時計が壊れてしまい、お人形が現れなくなってしまうのです。どうすればまたお姫さまの姿が見られるのか、みんなは必死になって考えます。



『ようちえんのおひめさま』

『おまかせ！ ヨーチェンジャー』（小学館・スギヤマカナヲ作・一三〇〇円）

いつも平和なおひさまようちえんの壁にらくがきされるといふ事件が発生。そこで園長先生はゆうなちゃんたち五人に事件解決を依頼します。五人はさっそくバッジをつけてヨーチェンジャーに

変身！

さくらほいくえんのこわいもの、それは悪いことをしたときに入れられてしまう真つ暗なおしれと、先生たちの人形劇に出てくるねずみばあさん。ミニカーを取り合ってケンカになってしまったあきらとさとの二人は、おしれに入れられてしまいます。最初は泣きべそをかいていた二人ですが、なかなか「ごめんなさい」を言いません……。

『おしれのぼうけん』（童心社・ふるたたるひ、たばせいいち作・一三〇〇円）はお父さんお母さんの中にも読んでこられた方が大勢いらつしゃるかと思えます。親子で一緒に思い出を共有できる本、というのも素敵だと思います。



『おしれのぼうけん』

幼稚園に行きたくない、と言ってしま

うお子さんもらつしゃいますよね。

『ようちえん いやや』（童心社・長谷川義史作・一三〇〇〇円）でもそんな光景が見られます。

「ようちえん いややー！」

おや？だれかが泣いてだだをこねていますよ。町のあちらでもこちらでも、みんな、「ようちえん いややー！」どうしてそんなに泣いているのかな？

幼稚園に行つてもらわなとお母さんは困るのだけど、でも、理由をきくとほっこり幸せになれる絵本です。



『おむかえ』

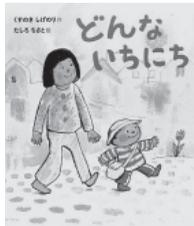
『おむかえ』（佼成出版社・ひがしちから作・一三〇〇〇円）

こたろうくんも、保育園の玄関で泣いています。お母さんと朝お別れするのがつらいのです。ずっとずっと泣いているこたろうくんを、ゆきこ先生はちゃんと

見守ってくれています。お昼寝の時間にこたろうくんは夢を見て……。朝にくらべてほんの少しだけだけれど大きくなったこたろうくんに、拍手を送りたくありません。

『おむかえまだかな』（学研教育出版・もとしいづみ作・おかだちあき絵・一三〇〇〇円）

かなちゃんは夕方の園でお母さんが迎えにくるのを待っています。まだかな？でんしゃがおくれているのかな？あれこれ想像しながら待っているかなちゃんがちよっと切なくて。お母さんが迎えにきたときは、読んでいる私たちもかなちゃんと一緒に嬉しくなります。



『どんないちにち』

『どんないちにち』（廣済堂あかつき・くすのきしげのり作・たしろちさと絵・一六〇〇〇円）では気持ちのいい朝の風景

が見られます。

出会った人にあいさつしたり、にっこり微笑みあつたり。お母さんと手をつないで向かった先はようちえん。先生にも元気に「おはようございます！」こんな風に関わりが始まるととても幸せだと思います。



『あした、がっこうへ
いくんだよ』

さあ、小学校へと参りましょう。

『あした、がっこうへいくんだよ』（評論社・ミルドレッド・カントロウイッツ作・ナンシー・ウインスロー・パーカー絵・せたていじ訳・一〇〇〇円）

主人公の男の子は明日初めて学校へ行くのです。期待と不安で揺れ動くドキドキした気持ちは誰にでも覚えのあること。彼はその気持ちをぬいぐるみのクマに打ち明けます。相槌や返事が返ってくるわけではないけれど、自分の気持ちを

言葉に出してみることで、なんだか頭がすっきりするような体験は大人にもあるものです。

初めて自分のランドセルを手にした喜び、というのもこの時にしか体験できないもの。以前は赤と黒のランドセル、たまに茶色くらいしか見かけなかったのに、最近はずっともたくさんのカラーバリエーションがあつて、選ぶのも大変。孫のうみひこくんにおじいちゃんが選んでくれたランドセルのお話は『ランドセルがやってきた』（徳間書店・中川ひろたか文・村上康成絵・一三〇〇円）。



『みてよ びかびか
ランドセル』

もう一つランドセルのお話を。

『みてよ びかびかランドセル』（福音館書店・あまんきみこ文・西巻茅子絵・一一二〇〇円）

ランドセルを買ってもらって嬉しくてたまらないかこちゃん。だれかに見せたくて、ランドセルを背負つてよもぎのほらに出かけていきます。最初に出会ったのはきつねの子。ランドセルを背負わせてと言うので、貸してあげます。次に出会ったうさぎの子にもランドセルを背負わせてあげます。最後に出会ったねずみの子もランドセルを背負いたいと言いますが、ねずみの子には大きすぎて背負うことが出来ません。泣き出してしまったねずみの子。そこへねずみのお母さんがやって来て……。



『さくらの
さくらちゃん』

庭の桜の木も入学式をお祝いしています。

『さくらのさくらちゃん』（自由国民社・中川ひろたか文・植垣歩子絵・一三〇〇円）
桜の花びらのさくらちゃんは、ひろちゃ

んがいつもと様子が違うのを感じて、ひろちゃんの頭にちょこんと乗っかって、入学式についていきます。学校へ行く道で出会う新一年生たち、学校や教室の様子を見守るさくらちゃん。新しいお友達や先生、そしてお父さんお母さんたち、みんなドキドキしているようです。

『いちねんせいになったから！』（講談社・くすのきしげのり作・田中六大絵・一四〇〇円）

りゅうたろうくんも入学式に向かっていきます。りゅうたろうくんは考えます。「どうやったらもだちがひやくにन्दできるかな？」大きな声で自己紹介？英語なんか使ってみたり？どんな想像はふくらんで……。



『いちねんせいになったから！』

さてさて、そんな小学校っていったいどのようなところなのでしょう？ 幼稚園

園とはどう違うの？という疑問にお答えする本をいくつか紹介します。

『しょうがつこうへいこう』（講談社・斉藤洋作・田中六大絵・一四〇〇円）

迷路や間違い探し、絵探し、クイズなど、遊びながら学べる絵本です。

『いちねんせいのいちにち』（佼成出版社・おかしゅうぞう作・ふじたひおこ絵・一五〇〇円）

国語の時間、算数の時間、給食、体育など、一年生の日を追って紹介している絵本です。

『いちねんせいのがつこうたんけん』（佼成出版社・おかしゅうぞう作・ふじたひおこ絵・一五〇〇円）

自分たちの教室以外に、学校の中の体育館や図書室、音楽室など様々な場所を紹介しています。

『いちねんせいのはる・なつ・あき・ふゆ』（佼成出版社・おかしゅうぞう作・ふじたひおこ絵・一五〇〇円）

遠足、運動会、音楽会などの学校行事を紹介しています。

『1ねん1くみの1にち』（アリス館・川島敏生写真・文・一六〇〇円）

とある一年生の教室を一日定点観測し

た写真絵本。だれもいない教室から始まって、生徒が一人、二人とやってくる様子、授業中や休み時間、給食の時間、掃除の時間……写真をみているだけでにぎやかな声が聞こえてきそうです。誰もいなくなった教室にぼつんと残された忘れ物。この本の中で色々な物語を想像してみるのも楽しいと思います。



『1ねん1くみの1にち』

『となりのせきのますだくん』（ポプラ社・武田美穂作・一二〇〇円）をはじめとする一連のますだくんシリーズは、小学校に通い始めた一年生の日常に沿った絵本です。

ひっこみじあんのみほちゃんは、隣の席に座っているますだくんのことが苦手。なにかというところばっかりを出してくるし、いやなことばかりするから。

『ますだくんの1ねんせい日記』では、

ますだくん側の言い分が書かれていきます。何をしても受け入れられるばかりだった子ども時代から、気持ちのすれ違いや、本当はそんなつもりじゃないのに誤解されてしまうこと、人と付き合っていく上でのままならなさのようなものを学びながらだんだん大人に近づいていくんだなあ、と思わせられる物語です。



『ふつうに学校に行く
ふつうの日』

『ふつうに学校に行くふつうの日』（小峰書店・コリン・マクノートン文・きたむらさとし絵・柴田元幸訳・一三〇〇円）
この本は新入生の話ではありませんが、新しく誰かと出会うことでこれまでとは何かが違う世界が広がるという絵本です。

ふつうの男の子がふつうに学校に行き、ふつうの日々を過ごす日々。それがある日、一人の先生がやってきて今まで

見たことも聞いたこともない授業をしてくれたことがきっかけで、「ふつうの日」がほんの少し変わってきたというお話。誰かとの出会いや、何かのきっかけで、これまでの価値観が変わったり想像力が膨らんだり、思いもよらなかった方向へ進んでいくということ、学校生活というのはこういう出会いやきっかけを得るためにあるようなものかもしれません。

最後に新入学のお祝いとしてお勧めの本を紹介します。

『6さいのきみへ』（小学館・佐々木正美作・佐竹美保絵・一三〇〇円）

生まれてから今日の日を迎えるまでのこと、これからへの期待を込めてお子さんへ贈るメッセージブック。

『いちねんせい』（小学館・谷川俊太郎詩・和田誠絵・一〇〇〇円）

初めての学校生活、なにげない日常の中でふとよぎった一年生の気持ち。大人が見のがしてしまいたいような驚きや喜びがここにあります。

『ともだち』（玉川大学出版部・谷川俊太郎文・和田誠絵・一二〇〇円）

ともだちって、いっしょに遊んだり、

たまにけんかをしたり、困っているときには助けてあげたいと思う人。これからの学校生活でそういう存在に出会えるように願いをこめて。



『教室はまちがうところだ』

『教室はまちがうところだ』（子どもの未来社・蒔田晋治作・長谷川知子絵・一五〇〇円）

間違うと恥ずかしい、笑われるのがいやだ。そんな風に思ってしまったら教室でも発言できなかつたりします。

もし教室の中が、誰かが間違っても絶対に笑ったりしない、みんなで一緒に考えたり教え合ったりするのが当たり前前の雰囲気ならば、もっと気持ちが楽になるはず。是非ともそんな教室を作ってほしいです。

（三宮駅前店・池畑）

今月の
おすすめ

社会科学

CIAの秘密戦争

マーク・マゼッツィ著

二〇〇一年の同時多発テロ以降、アメリカの軍事政策は一変した。

本書にはニューヨーク・タイムズの記者による、アメリカの大規模戦争の「裏」が描かれている。たとえば、CIAは高性能のビデオカメラとミサイルを搭載する無人機「プレデター」を使った暗殺任務をこなす、準軍事組織へと様変わりした。またペンタゴンもスパイ組織を立ち上げ、正規の戦場の外でテロリストを追い詰めた。膨大な取材をもとに書かれた内容は、非常にスリリングな一冊となっている。

早川書房

二二〇〇円

震災編集者

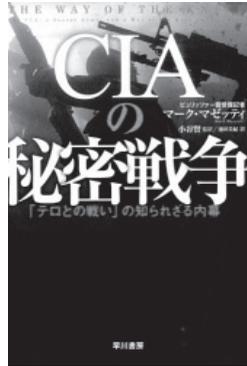
土方正志著

著者は仙台の出版社、荒蝦夷あらいまひの代表。社員二名で東北をテーマに良質の本を出

している、二〇〇五年に誕生した会社だ。東日本震災で、東北の出版社と書店は甚大な被害を受けた。しかし彼らは挫けなかった。全国から励ましや支援活動があったが、特に印象的だったのは、阪神大震災を経験した神戸の人々からの激励だ。経営面で苦境に立たされたが、決して諦めなかった五年間がまとめられている。様々な出会いと別れが描かれていて、感動の涙を誘う一冊だ。

河出書房新社

一六〇〇円



監察医が泣いた死体の再鑑定

上野正彦著

著者は東京監察医務院の元院長。退職後はフリーの法医学者という立場から、様々な死体の鑑定依頼を受けている。この本に書かれた事件の数々は、テレビの

二時間サスペンスを思わせるストーリーの連続だ。上野氏に再鑑定が持ちこまれるだけあって、殺人か交通事故か、はたまた病死なのか等、一筋縄でいかないケースばかり。死体を相手にする特殊な職業の実態がわかりやすく紹介されていて、経験に裏打ちされた推理や冷静さにはただ感服させられるのみだ。とても充実した内容で、一気に読ませる面白さがある。

東京書籍

一四〇〇円

熟年売春

中村淳彦著

今、熟年女性の売春が増加している。それは大学を出て就職し、普通に結婚をした女性である場合が多い。全国三十万人以上いると言われる彼女たちは、月数万円の生活費に困って身体を売っている。「職業としてのAV女優」(幻冬舎新書・八〇〇円)などのある著者の中村淳彦は、鶯谷を中心に熟年売春婦たちの取材をし、熟年売春婦たちの生の声を多数収録した。一億総活躍社会と謳われる一方、年金減額、介護報酬減、大学奨学金回収の強化、労働者派遣法改正などによ

り、今後も益々売春への道に誘われる女性が増えると著者は予測する。

ミリオン出版 一〇〇〇円

絶望の牢獄から無実を叫ぶ

片岡 健編

副題は「冤罪死刑囚八人の書画集」。以前に比べて、マスコミで冤罪関連のニュースが取り上げられる機会が増えている様に思われる。そして、冤罪と戦ってきた人々の苦闘が、日本社会と冤罪問題との関係を大きく進歩させて来た。

編者は、冤罪の疑いのある様々な事件を取材する中で、無実だと確信するに至った八人の死刑囚をその書画とともに取り上げている。本書は、現在進行形のこうした事実を記録し、後世へと伝える役割を編者から託された。

鹿砦社 一八〇〇円

サイロ・エフェクト

ジリアン・テット著

著者はフィナンシャル・タイムズ紙アメリカ版の編集長であり、東京支局長の経験もある人物である。

英語圏では政府や企業に関わらず、組

織が専門化し、細分化した状態をサイロという。その狭いサイロの中の集団行動が時として、愚劣にも関わらず内部からは判断できないことが起こる。その愚かな決定や行動の原因を人類学的手法で分析し、後半ではサイロを打破した事例を挙げたのが本書である。

しかし、著者はサイロを完全否定しない。サイロをコントロールすることを訴えている。

文藝春秋 一六六〇円



吉野家で経済入門

安部修仁・伊藤元重著

二〇〇三年のBSE騒動以降、吉野家は大きく変わった。その全貌が吉野家HD会長と経済学者の二人によって語られている。

かつての牛丼だけの一枚看板から、バジ耳、麦とろ、鰻重などメニューは多角化し、高齢者やファミリー層を取りこもうと必死だ。価格競争や人材育成、海外戦略といった、経営の裏側がよくわかる内容となっている。日本は少子高齢化が進行中だ。これからの伸びない市場で稼ぐだけの強さが、吉野家からは感じられる。

日本経済新聞出版社 一三〇〇円

デジタルが変わる アニメビジネス

増田弘道著

アニメ制作会社の経営者の経験を持ち、現在は業界団体に勤務する著者によるアニメ産業を分析した重厚なレポートである。日本のアニメ制作の現場でデジタルアニメ化が進んでいることを伝えている。また、アメリカのアニメ産業でデジタルアニメ化が進んだ経緯も取り上げ、日米の比較もしている。ユーチューブなど配信の環境も大きく変化する中で、日本のアニメ産業は生き延びることが出来るか、という課題に至り、人材育成と経営戦略の変革を求めている。

NTT出版 二四〇〇円

今月の
おすすめ

コンピュータ

擬人化でまなぼ!

ネットワークのしくみ

岡嶋裕史著 「艦隊これくしょん」や「刀剣乱舞」を生んだ擬人化ブームの波に乗る、なんと擬人化コンピュータ書が登場。本書はTCPやHTTPといったネットワーク用語が美少女キャラクターに姿を変えて仲良くおしゃべりするという、かなり衝撃的なもの。しかし侮るなかれ、彼女たちの会話の内容はパケットの仕組みや各種の脆弱性など、ネットワークの基本についてしっかり学べるものとなっている。

翔泳社

一九八〇円



たのしく Ruby 第5版

高橋征義・後藤裕蔵著

まつもとゆきひろ監修

初版から十四年。これまで Ruby というプログラミング言語を習得したひとの多くが、一度は本書を手にとったことがあるのではないだろうか。監修に Ruby の言語作者まつもとゆきひろ氏、著者のひとりとは日本 REIJA の会代表高橋征義氏と、Ruby の成長を第一線で支えてきたひとたちの手による、たのしい Ruby プログラミングへの案内書、その最新版。SBクリエイティブ 二六〇〇円

イラストで学ぶディープラーニング

山下隆義著

囲碁「アルファ碁」がプロ棋士相手に勝ち越した件が記憶に新しいが、ここでもディープラーニングという技術が用いられている。コンピュータ自身に判断基準を獲得させることを目的とした、機械学習の手法だ。同社からは専門性の高い「機械学習プロフェッショナルシリーズ」も刊行されているが、本書はより広い読者に向けた入門書になっている。

講談社

二六〇〇円

岩波データサイエンス vol.2

データを扱うさまざまな分野のトピックを取り上げる岩波データサイエンスシリーズの第二巻が刊行された。昨年十月発行の第一巻はベイズ統計の特集だったが、今回のテーマは自然言語処理。本来ひとが用いることはをいかに機械に扱わせるか、その可能性と問題をさまざまなアプローチから検証している。エンジニア、研究者の垣根を越えた多彩な執筆陣も本シリーズの魅力のひとつ。

岩波書店

一三八九円

マイクロサービスアーキテクチャ

Sam Newman 著 佐藤直生監訳

木下哲也訳 マイクロサービスアーキテクチャはアジャイル開発などで知られるマーチン・ファウラー氏が提唱し、注目を集めている開発手法。堅牢だが変更がしづらいモノリシック（一枚岩）な開発に対し、独立した小さなサービス群をゆるやかに結合することで、変更の容易さやスケラビリティを実現しようというものだ。Amazon などの採用事例を交えて紹介している。

オライリー・ジャパン

三四〇〇円

今月の
おすすめ

自然科学

虫のしわざ観察ガイド

野山で見つかる食痕・産卵痕・巣

新開 孝文・写真 齧られた葉や樹木

にいた小さな穴。フンや巣、葉っぱに印されたマイン。それらの虫が残した痕跡を「虫のしわざ」と呼び、姿が見えない彼らを追いかける手掛かりにしようというのが、この本のテーマである。

今まで気に留めずにいた様子が実は「虫のしわざ」だったと気づいてからは、それらしきものを見つけると「しわざのヌシ」を知りたくなる。まるで人探しならぬ虫探しをする探偵になった気分分で、これがなかなか面白いのだ。どんな虫がなんのためにこんなしわざを？と疑問をもちながら調べることで、虫の生態をより身近に感じることが出来る。

細部をとらえた鮮やかな写真のおかげで、どの「虫のしわざ」もとてもわかりやすい。よく目にする「虫のしわざ」を一覧にしたページがあり、逆引きができ

るため、フィールドでは必携の一冊だ。子どもから大人まで、ひと味違った虫探しを楽しむ事ができる。

文一総合出版

一八〇〇円



星空の演出家たち

中日新聞出版部著

直径三十五メートルという世界一大きいプラネタリウムを持つ名古屋屋科学館。二〇一三年八月に完成した「プラザールアース」というこのプラネタリウムでは、台本なしのマイク一本で五十分間を、生身の人間が対話形式で解説をおこなう。

「一日として同じ解説はしない」というのが開館以来のコンセプト。これには解説者の力量が大いに問われる。毎月変わるテーマに沿った解説の他にも、その日の天気や最新情報を交えた内容でなけれ

ばならない。また、決して疎かにできないのは、観客を惹きつけるための声のトーンや間合いといった「話す技術」。解説者たちは、神話や伝承、宇宙物理学、地学、気象など各自の得意分野を活かした解説を繰り広げる。

彼らはいかにしてプラネタリウムの解説者となったのだろうか。本書ではその道程が語られている。研究者を志した者、元教員、気象会社や雑誌編集等の企業経験者と経歴はそれぞれ異なるが、今は「限りなく本物に近い星空を届けたい」という想いのもとでチーム一丸となって働いている。その仕事ぶりはまさに職人のよう。細部にまでこだわり妥協はしないという徹底したプロ集団だ。

科学館が改築されて今年で五年になるが、プラネタリウムは今も毎回満席だという。リニューアルされた装置が最新鋭であることに加え、創立当初から脈々と伝えられてきた解説者魂が人気の秘密ではないだろうか。

各章の終わりには学芸員のコラムや春夏秋冬の星に浮かぶ星座のイラストも掲載されている。

中日新聞社

一四〇〇円

今月の
おすすめ

医学書

研修医・コメディカルのための
問診力養成道場

長尾哲彦著

臨床では、患者のことをよく知ることから始めなければならぬ。問診・視診・聴診・打診・触診は診察の基本であり、特に問診は八割診断がつくと言われるほど重要とされる。問診のポイントは、患者の中に眠っている診断の鍵をうまく引き出すことだという。本書は様々な症例（症状の訴え）を挙げ、問診（情報収集）を基に最終診断にたどりつく思考方法を解説する。効率的な問診を行うためのスキルを磨ける一冊。

医学と看護社

三五〇〇円

手話を生きたる

斉藤道雄著

これまで行われてきた、ろう者が聴者のようになることを目標とした「聴者のろう教育」ではなく、日本のろう者・ろ

う児の母語である「日本手話」を全面的に授業に取り入れた教育を行う日本初にして唯一の学校、明晴学園（東京都品川区）。その立ち上げ以前から関わる、ジャーナリストである著者が二十年にわたる取材を通し、ろう教育の歴史、手話が向き合ってきた困難、海外事情など手話の世界の過去・現在、そして未来を描く。

少数言語としての手話を操り、「ろうがいい、ろうでいい」と捉える学園の子どもたちの活き活きとした姿は、読後、世界の見方を変えてくれるかもしれない。

みずず書房

二二六〇〇円



この失神、どう診るか？

安部治彦編著

今日、失神に対して正しい診断を行える医師はどれくらいいるのだろうか。本書

の失神ガイドラインの認知度調査結果によると、国内の一般循環器内科や不整脈専門医の方々の認知度は低く、大半は認識不足という結果であった。

総論では「失神の診断・治療ガイドライン」に基づき、失神に対して診断のアプローチの仕方を三つのステップに沿って説明している。さらに各論では、実際に起きた二十の症例を取り上げ診断・治療・経過に関してまとめている他、役立つトピックスやコラムなども紹介している。循環器内科医だけでなく、一般内科医にとっても失神に対する理解を深める一冊となるだろう。

メディカ出版

三六〇〇円

イラスト

みんなの感染対策

下間正隆・小野 保・

近藤大志・澤田真嗣著

感染対策を病院の全職員で行うために、大切な事がひと目でわかるようなインパクトのある楽しいイラストで説明されている。誰でもできる「手をきれいにすることから感染対策は始まっている。

照林社

二四〇〇円

今月の
おすすめ

人文科学

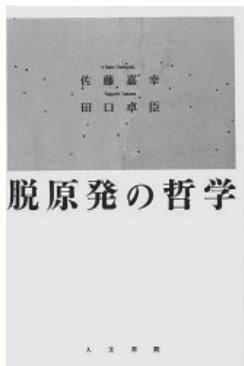
脱原発の哲学

佐藤嘉幸・田口卓臣著

哲学書のコーナーに並べられた本書は見るものに新鮮な印象を与える。時事的・政治的な文脈で語られてきた「脱原発」が、はじめて哲学の問題として提示されたからだ。脱原発と核廃絶という理念は、可能な限り早く実現されるべき切迫した理念である、と著者は確信する。これ以上のカスタトロフィを避けるために、脱原発の哲学が必要とされている。

人文書院

三九〇〇円



1493

世界を変えた大陸間の「交換」

チャールズ・C・マン著

二〇〇七年にNHK出版から出た『1491』（現在は品切）の続編。前作でコロンブス到着前の世界を描き出した著者は、今作ではコロンブス到着後に何がどのように動き出し、世界がどのように「グローバル化」することになったか、その端緒を描き出す。著者は学者ではなくサイエンスライターで、読みやすく、且つ読み応え充分である。

紀伊國屋書店

三六〇〇円

一流の狂気

ナシア・ガミー著 偉人の評伝などで、その人物がいわゆる「普通」ではない、変わったところがあり、ともすると狂気

ともとれる性質を持った人物であったというエピソードはよく聞くものだ。本書では歴史学と心理学の二つのアプローチからその実態を探る。リンカーンやケネディ、ガンディーなど歴史上の人物達の精神疾患をとりあげ、危機的情況におけるの彼らのあり方を解説する一冊。

日本評論社

二六〇〇円

人口減少社会と寺院

櫻井義秀・川又俊則編

先頃出版された『寺院消滅』（日経BP社・一六〇〇円）は地方から寺と墓が消えていく事態を報告して話題になった。本書は同じ問題意識に基づいた詳細な調査研究である。

結局、人口減少社会にあつては、地方寺院の消滅は避けられないのかもしれない。とはいえ、地域福祉の担い手としての寺院の可能性は見直されなければならない。

法蔵館

三〇〇〇円

伝説の保育士

のりこ先生の魔法のことば

山田清機著

例えば食器は陶器かガラス製。割れると思えば子どもは大切に扱い、実際にはとんと割ることがない。本物志向で、子どもを徹底して一人前扱いし、可能性を引き出す保育を貫いた「のりこ先生」。いち早く異年齢保育を取り入れるなどの進取の精神に、情熱、気品で関わるみんなに慕われ続けた伝説の保育士の記録。

プレジデント社

一四〇〇円

今月の おすすめ

文学・文芸

光の庭

吉川トリコ著

「銀チヨコラバーズフオーエバー!」

三千花・志津・麻里奈・理恵・法子
仲の良い少女たちは高校卒業のあの日、自分たちの友情は永遠だと信じて叫んだ。しかしそれぞれが進学、就職などで別々の道へ進んだことよってその関係ははかなくも崩れていく。そんななか迎えた成人式の数日後、三千花が少年グループに拉致されバラバラ死体で発見される。そしてその事件の十六年後、志望通りライターになったものの挫折して地元に戻った志津は「三千花に何が起こったのか」をテーマにルポを書こうと、友人たちに取材を始めるが……。

作者が自分と同世代の女性たちの生きる様を心理サスペンスの要素も加えながら綴る物語である。輝かしい未来を信じつつ笑っていた少女たちが、それぞれの現実に直面して傷ついたり、欺瞞に満ちた

暮らしを綴ったり、心の闇にとらわれ抜け出せずいたりする様が描かれ、そしてその状況に安易な解決は与えられない。それでもタイトルの「光の庭」で象徴されるような、キラキラと楽しかったあの時間は否定されるものではないという思いが胸に残るのだ。

光文社

一八〇〇円

ロバのサイン会

吉野万理子著

淋しいのは人間だけじゃない。帯にあつたその言葉が妙に気になつて手にとつた。テレビ番組で人気者になつたロバを筆頭に、この物語には猫・イルカ・鹿・イグアナ・犬・蝶・セキセイインコ、と様々な動物たちが登場する。ドラマに登場する人気女優猫・リリアンや、たまごを産んでも産んでもどこかへやられてしまうパン好きなイグアナ・ネムリン、害獣として扱われて奈良公園へ逃亡した鹿・サシカク、そしてサイン会を開催するほど

人気者になつた旅するロバ・ウサウマ。彼らの生活に人はいろんな形で関わらを持つている。人間の言葉なんて理解な

どしてやいない、そんな油断から、人は彼らに対してはいつもより横柄になつたり、弱音を吐いてしまつたり、優しくなつたりしてしまふ。人間の都合にふりまわされるたび、彼らの心にぼつかりと淋しさが浮かぶ。それでも種の生き方を忘れず、時折ひとに寄り添う動物たちの姿は、強く、そしてとても愛らしい。

光文社

一四〇〇円

まく子

西加奈子著

実際に会つたこともあるからそうでないのはわかっているけど、西加奈子さん本当は男の子だつたのではないだろうかと思つてしまふほど、その年頃の男の子の心理や生理的な状況を恥ずかしところまでよくわかっている。

大人になりたくない男の子が美しいけど謎のある転校生の少女に出会つて始まる、典型的なボーイミーツガールの物語だけど、最後に大仕掛けが待っていて、「さすが西加奈子」と思わずにはいられない。そしてストレートに届けられるメッセージを力強く受け止めるのだ。

福音館書店

一五〇〇円

今月の
おすすめ

文庫・新書

名作うしろ読み

斎藤美奈子著

「うしろ読み」の「うしろ」は作品の最後の一文、つまり「オチ」のことだ。昨今ネタバレに厳しい世の中になっていると言っても大袈裟ではないと思うが、著者は「ネタバレに耐えてきた（＝オチが分かっている）でも魅力の衰えない」作品こそ、古典、名作と言えるのではないかと提案している。

そこでこの「うしろ読み」。小説の有名な冒頭の一文は知っていても、意外とその話がどう終わっているのかは知らなかったりする。いかにして最後の一文に至ったかをこの本で知れば、きつと読んでみたくなる一冊に出会えるだろう。

大きく七つのテーマに分けて解説されているので、テーマごとに気になるものを探してもよし、ページごとに気になるものを探してみてもよし、ページをばらばらめくってみて、ピンときた作品があったらそれが出会いかもしれない。

中公文庫

六八〇円

バスを待つて

石田 千著

バスにゆられながら見知った景色をほんやりと眺めている、隣の席のあの人にも、後ろの席のあの人にも、その人だけの日常がある。そんな当たり前のことを、めまぐるしい日々の中でつい失念しては、自分だけが、自分だけが、という気分になってしまっていたけれど、路線バスに乗る人々の姿を描いたこの短編集を読んでいるうちに、ばらばらと散らばっていたものを整えてもらえたような、そんな気分になった。

石田千さんの描く人々の日常は、短編集のキーワードがバスであることですら一瞬忘れてしまいうくらいに、優しくなむ。

心地よい出来事ばかりではないけれど、読後は陽だまりでうとうととしていような、そういう心地よさが残る。

遊びに行く途中、仕事にでかける途中、誰かに会いに行く途中、バスにゆられながら読みたくなる一冊。

小学館文庫

六三〇円

シヨッピングモールから考える

ユートピア・バックヤード・未来都市

東 浩紀・大山 顕著

地方都市や郊外に、今や必ずあると言ってもいいであろうシヨッピングモール。地元商店街の敵、街の衰退の原因とされ、あまり良いイメージで論じられることはなかったが、本当にそうなのだろうか。なんだかんだ言われながらもシヨッピングモールにこれだけ人が集まるのはなぜなのか。

家族連れにとっては明らかに居心地のよい場所であるし、高齢者にもやさしい。日本だけでなく、シヨッピングモールの形態というのは世界で共通するところが多く、また駅や空港、病院もシヨッピングモールのようになってきているという。ということとは、実はシヨッピングモールというのは理想的な都市空間ではないのだろうか。

実際の例を上げながら、シヨッピングモールという空間から未来の都市や人間の欲望まで、幅広く考察する。

幻冬舎新書

八四〇円

今月の
おすすめ

芸術

めくるめく現代アート

著 葉奈子

現代アートは難しい。理解できない。何がすごいのか正直分らない、でも理解できないとは言えない。理解しようと入門書に手を伸ばしてみるもの、難しい単語の羅列に数ページ読むだけで気がめいり、あつという間に険が下がり、いつの間にか夢の世界へ……。

こういった経験をした事がある方にこそ本書をお薦めしたい。重要なキーワードを、二ページ程度で解説している。イラストが多いので楽しく読み進められる。

本書を読んで現代アートに興味が出た方や、もっと深く現代アートを理解したいノという方向けに、本書読了後に読むべきお薦め本のコーナーがあるのも嬉しい。

フィルムアート社 一五〇〇円



NAKUNA

蒼井ブルー著

Twitterのフォロワー数が十五万人を超えるフォトグラファー、蒼井ブルーさんのツイートから抜粋、さらには加筆やエッセイを加えた本書。前作『僕の隣で勝手に幸せになつてください』(KADOKAWA・一三〇〇円)に続き、待望の書籍化、第二弾である。

Twitterから抜粋されているため、そのほとんどが一四〇文字以内のつぶやきとなっており、どこから読んで楽しむことができる。

好きなものは恥ずかしがらずに声に出して「好き」と言いたい。

今この瞬間も、考え方を少しだけ変えたら、実はものすごく幸せを感じることのできるのではないかと、前向きな気

持ちにさせてくれるような一冊。

共感できたり、言葉に出来なかったモヤモヤをハッと解消させてくれたりと、とにかく、「やさしさ」がたくさん詰まっている。

KADOKAWA 一三〇〇円

武満徹・音楽創造への旅

立花 隆著

本書は、現代音楽家として活躍した武満徹さんに、ジャーナリストでもある立花隆さんが一〇〇時間を超えるインタビューを行い、雑誌「文藝界」に連載していたものを、連載完結後十八年の時を経て刊行された書籍である。

音楽活動に関してはもちろんのこと、様々な人との交友録や活動など、「武満徹」という人物を深く知るうえで、盛りだくさんの内容である。

武満徹さんの名前や音楽はきいたことがあるけれども、よくわからない、という方が入門書として読むにはハードルが高いかと思う文章量であるが、実際読んでみたら面白いように読み進められる一冊である。

文藝春秋 四〇〇〇円

今月の
おすすめ

実用書
地図・旅行書

ケトジェニックダイエット

斎藤糧三著

近年大ブレイクした糖質制限ダイエットで糖質の摂り過ぎがメタボリックシンドロームの元凶であることが広く世間に認知された。その一方で、炭水化物を抜いて瘦せたダイエットの中には他の栄養素を無視した「誤った糖質制限」の為に体調を崩す人も多かったという。

「ケトジェニックダイエット」とは、体内で糖質が枯渇した際、糖に代わるエネルギー源として肝臓で脂肪酸から合成される「ケトン体」の生成を、最新の栄養学に基づいた食事法で活発にし、体脂肪を効率的に燃焼させる健康的かつ確実な痩身法だ。

著者が専門とする「機能性医学」による次世代栄養学の基本が盛り込まれた本書は、「正しい糖質制限」実践の手引きであると共に、健康維持のために毎日の食事がいかに大切かを教える「栄養学の

本」としてオススメの一冊だ。

講談社

一三〇〇円

ツレツレハナコのじぶん弁当

ツレツレハナコ著

おいしくて見栄えのするお弁当を、簡単に作りたい。世にお弁当の本は多々あれど、そんな望みを満たしてくれる本は実はそれほど多くないと思う。簡単に作れるけど味がイマイチだったり、おいしいけど手間がかかりすぎたり……。

そんな中、これぞ！とお薦めしたいのが本書。帯には「人に見せるためではなく、自分がホッとできるお弁当を！」「働くあなたに捧ぐ地に足のついた弁当レシピ92」とあり、この惹句にぐっときた方も多いはず。

インスタグラムで大人気なのに、人に見せるためのものじゃないと言いつけるの？とも思ったが、読み進めるうちに、誰かに褒めてもらうためではなく、蓋を取ったとき他ならぬ自分自身が嬉しくなるようなお弁当を、ということなんだろうな、と納得させられた。アレンジ自在な具なしひじき煮、漬け汁にオイスターソースをプラスした煮卵など、簡単に、

これはきつとおいしい！と思わせるレシピが盛りだくさん。

あなたもお弁当生活、始めませんか？

小学館

一一〇〇円

音鉄 耳で楽しむ鉄道の世界

片倉佳史著

乗り鉄、撮り鉄、車輛鉄……ひとつの「社会」を形成するほど、鉄道ファンの世界は広く深い。そこに新たに登場したのが音鉄、つまり音から鉄道を楽しむ人々だ。駅で、踏み切りで、車中で、風やカラスの鳴き声と戦いつつ、彼らは音源を収集する。そんなこととしてどうなの？と思った方にこそ手に取ってほしい。

著者は執筆に気分が乗らないときは蒸気機関車のドラフト音（特にSLやまぐち号）をかけると、「曇っていた空が晴れわたっていくように」テンションが上がると言ひ、またその友人は、就寝時に夜行列車の車内音をかけ、自宅に居ながらにして車中気分を味わうと言う。静かに深く、鉄道の音に耽溺する愉悅が伝わってくる一冊。

ワニブックス

一六〇〇円

今月の おすすめ

語学・辞典

翻訳者あとかぎ讃

翻訳文化の舞台裏

藤岡啓介編著

私たち日本人が海外文学を読むとき、翻訳者がなぜその作品を選び、そしてどのように訳出したのか、そのすべてが「あとかぎ」や「解説」に書き込まれている。作品がそれほど知られていない場合は、それが生まれた時代背景や同じ作者の他の作品について詳しく「解説」されている。私たちは翻訳者の解説を通して、作品周辺の情報を知り、さらに理解を深めることができる。

本書では幾つかの作品の「解説」もふくめた「あとかぎ」を収めている。とり上げられるものは一般に知られた作品が多く、『乞食と王子』『論語』『ライ麦畑でつかまえて』など、その「解説」が書かれた当時に反映して歴史的仮名遣いや旧字を残している。著者が「日本の近代文化は翻訳の歴史」と述べるように、私た

ちの話す言葉や思考法、生活様式は外国文化の翻訳を通して形作られたものだと考える。このような観点からまとめられた本書は、翻訳に携わる方にとって役立つだけでなく、一般読者が言語や文化の歴史背景を知る上でも参考になるだろう。

未知谷

二四〇〇円

基礎がたぬ

一生モノの英文法 B A S I C

澤井康佑著

春は始まりの季節。英語の勉強を始めてみようと考えている人も多いのではないだろうか？

英語をイチから説明している書籍は数多くあれど、説明が簡潔すぎて理解しにくかったり、逆に詳しくすぎて読み終えられなかつたりしがち。本書はアルファベットの説明から入るなど、英語の初歩から始めている一方、文法項目では本質までしつかり説明している。長い説明は読み切れないと感じるかもしれないが、付属の音声サポートしてくれる。それも本文の単純な読み上げではなく、予習用にこれから勉強する内容を説明する音声と、復習用に要点を説明する音声の二種類の

講義形式音声がついていて安心だ。

ベレ出版

一八〇〇円

先生、その英語は使いません！

学校で教わる不自然な英語100

キャサリン・A・クラフト著

日本人が学校で教わってきた英語には、正しいけれど古い表現や不自然なフレーズが多いという。著者は英語ネイティブで通訳翻訳者であり、予備校の英語教師をしながら、学校で使われている教材や試験問題などを沢山見してきた。そこで目にする、正しいけれど不自然な「教科書英語」を取り上げ、ネイティブが普段どのような表現を使っているか紹介する。また、教科書英語を聞いた時にネイティブが連想するイメージがユーモラスなイラストで描かれており、ネイティブが受ける違和感が分かりやすく紹介されている。この違和感を理解できれば、自然な英語表現ができるようになるだろう。

長い間学校や教科書で習って当たり前だと思っていた「教科書英語」から一歩踏み出し、よりネイティブの表現に近づけるようになれそうだ。

DHC

一四〇〇円



児童書

きかんしゃ ホブ・ノブ

ルース・エインズワース作

上條由美子訳 安徳 瑛画

あかいきかんしゃホブ・ノブは、どうぶつたちをのせ、ゆうえんちへ。

真つ暗なトンネルをこわがるみんなのため、「ぼー、ぼー、ぼー」と汽笛をならし、あかやきいろのひのこをはきだして、トンネルを明るく照らします。シンプルでやさしい文章と温もりのあるタッチで描かれた乗り物絵本です。

福音館書店

九〇〇円

ポンちゃんはお金もち

たかどのほうこ作・絵

テストが悪くて勉強中のコータのもとへ、不思議な少年ポンちゃんが現れます。

移動遊園地でポンちゃんは気前よくコータと一緒に遊ぶのですが、次から次へと十円玉を取り出すポンちゃんは一体何者なのでしょう。

同時刊行『たらふくまんま』（馬場のぼる作・絵）は人の家のものまで何でも食べてしまう大食らいの山男が主人公で、こまつた村人のもとへ旅の医者が通りかかります。

こぐま社から創刊された幼年童話シリーズ（こぐまのどんどんぶんこ）お話を聞くだけでなく自分で読む楽しさを、絵本から読み物へ世界を広げる応援をする、新シリーズの誕生です。

こぐま社

一二〇〇円

ややつ、ひらめいた！

奇想天外発明百科

マウゴジャタ・ミチエルスカ文

アレクサンドラ・ミジエリンスカ&ダニエル・ミジエリンスキ絵 阿部優子訳

古代から現代まで人の空想はつきることなく、次々に発明品を生み出してきま

した。中には突きつめるあまり奇抜な形になり、完成に至らなかつたものもあります。思わず笑つてしまうような発明や最近のものなど二十八点が紹介されています。一つ一つの発明品からは作者のユニークな閃きと熱い思いが伝わってくるようです。

徳間書店

二〇〇〇円

幼い子は微笑む

長田 弘詩

いせひでこ絵

昨年この世を去った詩人長田弘さんの詩が、画家いせひでこさんによって絵本になりました。同じコンビによる前作『最初の質問』の透明感のある美しさはそのままに、人間として成長していく哀しさが伝わってきます。

「何かを覚えることは、何かを得るということだろうか」今は亡き詩人の言葉は静かな鋭さを持って問いかけてきます。

講談社

一五〇〇円

ぼくのなかのほんとう

パトリシア・マクラクラン作

若林千鶴訳 たるいしまこ絵

ひとりっ子のロバートの両親は音楽家。仕事が忙しく、ロバートはお母さんがはくよりパイオリンのほうが好きだと思つています。両親が仕事で家を長期間空ける事になり、ロバートはおばあちゃんのところに行くことになりました。周りの大人たちに見守られながら母と子の心がとけていきます。

リーブル

一三〇〇円

『終わった人』

松尾 まなみ

— 定年って生前葬だな —

物語は、このつぶやきからはじまる。主人公は田代壮介・六十三歳。高校で「できなくはないが、できるわけでもない」クラスに振り分けられたことから発奮し、猛勉強をして東大へ。銀行員としてエリートコースを歩むが、役員にはなれず、社員三十人の子会社の専務取締役として定年を迎えた。生前葬とは、定年の最後の日、社員たちから華やかに見送られ、黒塗りのハイヤーで自宅まで送ってもらうことを、自嘲してたとえただ。

「俺は終わった人なのだ」と思いながらも「終わった」ことを受け入れられない。妻との家庭生活もしっかりと歯車がかみ合わず、スポーツジムへ通っても「ジジババばかり」と楽しめない。壮介の「終われない」あ

がき方が、「なんていう往生際の悪さ！」と滑稽で、だけどどこかちょっぴり共感も出来て、どんどんページをめくる手が止まらなかった。

物語は、年下女性とのドキドキのラブロマンスあり、新たな目標の発見あり、そして壮介の人生は、思いがけない方向へ展開していく。ラストシーンは、心にじんときしみた。

これから定年を迎える人、定年を迎えたばかりの人、どちらの人からもこの物語の感想を聞いてみたいな、と思う。

(五十七歳・パート勤務)

*『終わった人』(講談社・内館牧子著・一六〇〇円)

『知の教科書 フランクル』

西村 登

本書は私にとって衝撃の一冊でした。

著者はフランクルの言葉「どんなときにも、人生には、意味がある」というこの一言をいろいろな角度からくり返しくり返し説明しています。この「どんなときにも」というのが大事なのです。とくに自分にとって「負」の体験が続くとき、人はやけっぱちになります。自分の例で言えば、小学校でいじめられ、仲間はずれにされる。やることなすこと失敗し、ヘボ、ヘボと冷やかされ、辛い毎日でした。でも登校拒否とまではいかなかった。それは母が「あんたはできるんだから……」と力づけてくれたり、上級生のNさん、Yさんが「こんどいじめられたら、わしらがやったるでな……」と強い支えになってくださったからです。いま米寿を前にして振り返ると、この辛かった時期こそ私の人生にとって、最も意味があったのだと、本書を読みながら気づいたのです。

フランクルが講演しているとき、ある青年が質問した。「私はただの洋服屋の店員です。私の代りなどどこにもいません。私の人生に、一体どんな意味があると言うのですか」フランクルは答えた。「仕事の大きさは問題ではありません。大切なのは、その活動の範囲で最善を尽くしているかです。一人ひとりの人間はかけがえなく代替不可能な存在です」(P. 一九四)

本書を読み進むうちに、私の心のなかのどうしようもなかった空虚さが埋まっていくような気持ちになった。人生から問われている自分の使命とは何か？ 私の魂が満たされた瞬間でした。

(八十八歳・無職)

*『知の教科書 フランクル』(講談社選書メチエ・諸富祥彦著・一五〇〇円)

ATION

<p>ジュンク堂書店 ＝名古屋栄店＝ ☎(052)212-5360 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝名古屋セントラルパーク店＝ ☎(052)971-1231 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ロフト名古屋店＝ ☎(052)249-5592 [営業時間] 10時半～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝名古屋店＝ ☎(052)589-6321 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN ＝岐阜店＝ ☎(058)297-7008 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN ＝四日市店＝ ☎(059)359-2340 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝滋賀草津店＝ ☎(077)569-5553 [営業時間] 10時～22時</p> <p>MARUZEN ＝京都本店＝ ☎(075)253-1599 [営業時間] 11時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝京都店＝ ☎(075)252-0101 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝奈良店＝ ☎(0742)30-1021 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝梅田店＝ ☎(06)6292-7383 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝関西国際空港店＝ ☎(072)456-6486 [営業時間] 7時～21時半</p> <p>丸善 ＝八尾アリオ店＝ ☎(072)990-0291 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝高島屋大阪店＝ ☎(06)6630-6465 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大阪本店＝ ☎(06)4799-1090 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝難波店＝ ☎(06)4396-4771 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝天満橋店＝ ☎(06)6920-3730 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝上本町店＝ ☎(06)6771-1005 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝梅田ヒルトンプラザ店＝ ☎(06)6343-8444 [営業時間] 11時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝近鉄あべのハルカス店＝ ☎(06)6626-2151 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝高槻店＝ ☎(072)686-5300 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮店＝ ☎(078)392-1001 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝西宮店＝ ☎(0798)68-6300 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸住吉店＝ ☎(078)854-5551 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝芦屋店＝ ☎(0797)31-7440 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮駅前店＝ ☎(078)252-0777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝姫路店＝ ☎(079)221-8280 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝舞子店＝ ☎(078)787-1250 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸さんちか店＝ ☎(078)335-2877 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝岡山シンフォニービル店＝ ☎(086)233-4640 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN ＝広島店＝ ☎(082)504-6210 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝広島駅前店＝ ☎(082)568-3000 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝高松店＝ ☎(087)832-0170 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝松山店＝ ☎(089)915-0075 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN ＝博多店＝ ☎(092)413-5401 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝福岡店＝ ☎(092)738-3322 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大分店＝ ☎(097)536-8181 [営業時間] 10時～20時</p> <p>MARUZEN ＝天文館店＝ ☎(099)239-1221 [営業時間] 10時～20時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝鹿児島店＝ ☎(099)216-8838 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝那覇店＝ ☎(098)860-7175 [営業時間] 10時～22時</p>
---	---	--	--

<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 札幌店 ＝ ☎(011)223-1911 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 水戸京成店 ＝ ☎(029)302-5071 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 日本橋店 ＝ ☎(03)6214-2001 [営業時間] 9時半～20時半</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 吉祥寺店 ＝ ☎(0422)28-5333 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>MARUZEN ＝ 札幌北一条店 ＝ ☎(011)232-0222 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN ＝ 丸広百貨店飯能店 ＝ ☎(042)973-1111 [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善 ＝ お茶の水店 ＝ ☎(03)3295-5581 [営業時間] 月～金10時～20時半 土10時～20時 日・祝10時～19時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 立川高島屋店 ＝ ☎(042)512-9910 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 旭川店 ＝ ☎(0166)26-1120 [営業時間] 10時～19時半</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 大宮高島屋店 ＝ ☎(048)640-3111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN ＝ 多摩センター店 ＝ ☎(042)355-3220 [営業時間] 10時半～21時</p>	<p>丸善 ＝ ラゾーナ川崎店 ＝ ☎(044)520-1869 [営業時間] 10時～22時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 弘前中三店 ＝ ☎(0172)34-3131 [営業時間] 午前10時～ 午後7時</p>	<p>丸善 ＝ 桶川店 ＝ ☎(048)789-0011 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 有明ワンザ店 ＝ ☎(03)5530-5701 [営業時間] 10時～19時半</p>	<p>丸善 ＝ 横浜ポルタ店 ＝ ☎(045)453-6811 [営業時間] 10時～22時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 盛岡店 ＝ ☎(019)601-6161 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 津田沼店 ＝ ☎(047)470-8311 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ メトロ・エム後楽園店 ＝ ☎(03)5684-5130 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 藤沢店 ＝ ☎(0466)52-1211 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>丸善 ＝ 仙台アエル店 ＝ ☎(022)264-0151 [営業時間] 10時～21時 日・祝10時～20時</p>	<p>丸善 ＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝ ☎(047)305-5808 [営業時間] 11時～21時、 土・日・祝10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 新宿京王店 ＝ ☎(03)5321-4685 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 新潟店 ＝ ☎(025)374-4411 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 仙台TR店 ＝ ☎(022)265-5656 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 松戸伊勢丹店 ＝ ☎(047)308-5111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 池袋本店 ＝ ☎(03)5956-6111 [営業時間] 月～土10時～23時 日・祝10時～22時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 岡島甲府店 ＝ ☎(055)231-0606 [営業時間] 10時～19時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 秋田店 ＝ ☎(018)884-1370 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 渋谷店 ＝ ☎(03)5456-2111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ プレスセンター店 ＝ ☎(03)3502-2600 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN ＝ 松本店 ＝ ☎(0263)31-8171 [営業時間] 10時～20時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 郡山店 ＝ ☎(024)927-0440 [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善 ＝ 丸の内本店 ＝ ☎(03)5288-8881 [営業時間] 9時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 大泉学園店 ＝ ☎(03)5947-3955 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 新静岡店 ＝ ☎(054)275-2777 [営業時間] 10時～21時</p>
			<p>丸善 ＝ 名古屋本店 ＝ ☎(052)238-0320 [営業時間] 10時～21時</p>

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。

定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

ブックブレスター



編集後記
 神戸発祥の旧ジュンク堂書店が阪神大震災後、大阪に初出店したのが千日前店。本格的な座り読みコーナーなど、全国展開につながる先駆けとなった店舗でした。三月二十一日二十年の幕を閉じ、閉店いたしました。長らくのご愛顧ありがとうございました。(司)

投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字×六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承ください。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―151-15
 丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係
 TEL〇三―15956―6111

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。
 定期購読料 年間二二二〇円(送料込)
 現金書留もしくは八十二円切手十五枚で
 お申し込み先
 〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―151-15
 丸善ジュンク堂書店特急係

TEL〇三―15956―6111
 FAX〇三―15956―6100



QRコード

PC・スマートフォンから
<http://www.junkudo.co.jp/>



改装して思うこと

三月三日、ジュンク堂神戸さんちか店は改装してリニューアルオープンした。

「さんちか」全館改装ということもあり、十一日間の休業期間を使つての作業は比較的余裕があつた。みな私服姿で作業を行う。書店の開店や改装はひたすら力作業が主であり、動きやすく汚れてもいいのが前提だ。見渡せばボーダーを着たスタッフが多数。その後ろにはボーダーを着た女はもてないなんて本が見える。そんなことはないと思いたいが、これに加えマスク・軍手、この姿でもてるはずはないだろう。

棚を新たに増設するにあたって、前半は並べている本を今ある棚から出す作業

が続いた。学生のアルバイトを投入した日は作業が早い。若さゆえ衰えを知らぬスピードである。一方、私達といえは少しすると体が痛くなり午前中のスピードは午後にはダウンしてしまふのである。悲しいかな。いろいろな現実を目の当たりにし、改装は続いた。

古い棚が外され、新しい棚ができると店の雰囲気が変わり、本を並べていくのはとても楽しい。スリッパや帯もキレイに直し、棚に入れるとなんて美しいのだと日々を反省（普段からできるように心がけよう）。保留していた荷物を入れるとすぐ開店できそうである。しかし床が汚い。以前にあった棚の場所は移動され、床には積年の汚れが覗く。古いスリッパや、お客様が落とされたであろうゴミ。なぜここにあるのか不明だが、爪楊枝が出てくるのは書店だけだろうか。開店前には清掃が入り、きれいになって開店を

迎えた。

十一日間の休業が明け、お客様が本当に来店してくださるか不安になりつつ当日を迎えたが、杞憂に終わったことはありがたいことだった。その上ずいぶん雰囲気が変わつた、きれいになったねというお言葉をいただけたということは、改装前の店を利用してくださったっていうのと実感できた。

今回は館全体の大改装ということで、新聞などのメディアも入り、大変多くのお客様が初日にご来店された。「ジュンク堂ができてる！」との声も聞こえ、オープンして二年半弱経つてはいたが、まだまだ認知されていなかった事も改めて感じた。神戸三宮には三店舗ジュンク堂があるということを少しづつでも知っていただけよう、努力していかなくては。これから正念場なのは間違いない。

(U)

「書標 ほんのしるべ」 第449号

編集・発行人 工藤 恭孝

発行所 (株)丸善ジュンク堂書店

印刷所 (株)七 旺 社

〒160-0008

〒653-0013 東京都新宿区三栄町二十九
神戸市長田区一番町二丁目一

二〇一六年四月五日発行 頒価五十円(本体四十六円)

「書標 ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2016年4月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第449号）



日本全国で
3,000万冊の品揃え!
丸善ジュンク堂書店

頒価 五十円（本体 四十六円）

ジュンク堂書店

淳久堂書店

M MARUZEN